

## 高村光太郎と

### 彫刻コレクション

メナード美術館の象徴的な存在、マリノ・マリーニの木彫『馬と騎手（街の守護神）』のことば既に述べたが、他にも石膏像『ウルリッヒ・ガッセルの肖像』、ブロンズ小品の『手品師』があり、共に貴重な彩色彫刻である。さて、近代彫刻の歴史は半世紀ほど遡つてオーギュスト・ロダンに始まる。ミケランジェロの作品に感動して彫刻家を志したロダンは、人間の生命力を生き生きと表現して近代彫刻への道を拓いた。当館には、代表的な『バルザック像（最終習作）』と『接吻』がある。又ロダンを頂点とする三本柱のひとりアントワーヌ・ブルデルは、代表作『弓を引くヘラクレス』や、終生のテーマだったベートーヴェンの連作『スカラーフを巻いたベトーヴェン』などがある。そして、アリスティード・マイヨールでは、一味違つた豊かな裸婦像『イール・ド・フランヌ』を所蔵す

る。人間存在を鋭く表したアルベルト・ジャコメッティは、まだ日本でもコレクションが少ないので、25周年記念展で初公開した『小像（男）』『小像（女）』は、極小の貴重な作品である。

ロダンに啓発されたのが高村光太郎である。

本来は父光雲ゆずりの木彫家だが、欧米に留

学して最新の美術界に触れ、『ロダンの言葉』を翻訳するなど彫刻の近代化に尽力した。

館では代表作『鯰』を所蔵しており、妻智恵

子の切り紙絵も合わせた特別企画展を計画し

ていた時、縁あつて『榮螺（さざえ）』を入手

した。生前、光太郎自身が再び見ることを願

いながらも叶わず、光太郎の弟、鑄金の人間

国宝高村豊周が、兄亡き後、週刊新潮の告知

板に、行方不明の『榮螺』を探している旨載

せた幻の作品である。制作間もなくから70年

が出来、入場制限もする盛況であった。

『ニュースは、中日新聞一面トップを飾ることとなつた。展覧会では話題を呼んで連日行列

が出来、入場制限もする盛況であった。

このふたりの先輩の遺鉢を継ぐのが、現代彫刻家の代表、第2回に述べた舟越桂である。

（元メナード美術館顧問）



高村光太郎  
《榮螺》1930

メナード美術館  
開館25周年記念  
コレクション名作展IV  
西洋美術  
10/6まで

歩姿がモデルの『靈龜隨』と太公望と云われる『釣隱』など、彩色の木彫だが、人生の深みを感じさせる顔が素晴らしい。更には、ロダンの影響を受け光太郎とも交友のあった高田博厚は、パリ在住の長かった彫刻家、当館にはブロンズの『美しきエミーI』がある。

近代の具象彫刻の歴史は、戦後になって、舟越保武と佐藤忠良の両巨匠が双璧だった。共に東北出身の同い年のライバルで、これ迄の彫刻界にない清新な風を吹き込んだ。当館では、舟越は大理石直彫りの『S嬢』『N嬢』、ブロンズの裸婦像『道東の四季・春（エスキス）』がある。佐藤では、共にブロンズで、有名な帽子シリーズの『帽子・冬』、あどけない童子の『ふざけっこ』がある。

このふたりの先輩の遺鉢を継ぐのが、現代彫刻家の代表、第2回に述べた舟越桂である。

平櫛田中がある。同じ高村光雲門下だが、岡倉天心を神のように崇め、釣人の大きな天心像が有名である。当館には、浅野長勲<sup>奈良</sup>公の散